

ランチョンセミナー2

日時：9月28日(日) 12:00～13:00

会場：第1会場(ソラシティホール)

皮膚科医と考える アトピー性皮膚炎治療薬関連結膜炎

座長1 片岡 葉子 先生 大阪はびきの医療センター 皮膚科 主任部長/院長補佐

座長2 海老原 伸行 先生 順天堂大学医学部附属浦安病院 眼科 教授

演題1 「アトピー性皮膚炎治療薬デュピルマブの臨床プロファイル： 乳幼児から大人まで、皮膚科医から見た連携の取り組み」

葉山 惟大 先生 日本大学医学部皮膚科学系
皮膚科学分野 准教授



<ご略歴>

2004年3月 日本大学医学部医学科卒業
2004年5月 日本大学医学部附属板橋病院研修医
2006年4月 日本大学医学部附属板橋病院皮膚科学系皮膚科学分野専修医
2012年3月 日本大学大学院医学研究科内科系皮膚科学卒業
医学博士
2012年4月 日本大学医学部皮膚科学系皮膚科学分野助手
2014年4月 日本大学医学部皮膚科学系皮膚科学分野助教/
病棟医長
2019年4月 日本大学医学部附属板橋病院アレルギーセンター
臨床部門長(兼任)
2023年4月 日本大学医学部附属板橋病院皮膚科病院准教授
2023年11月 日本大学医学部皮膚科学系皮膚科学分野准教授

アトピー性皮膚炎(AD)は、痒痒性の湿疹を特徴とし、2型炎症を背景とするありふれた慢性炎症性皮膚疾患である。

デュピルマブは本邦初のAD治療用生物学的製剤であり、インターロイキン(IL)-4受容体αに対する抗体製剤であり、IL-4とIL-13の作用を阻害することで2型炎症を抑制し、臨床的効果を発揮する。2018年の発売以降、その安全性プロファイルと臨床的有用性は実臨床においても広く認識されている。2023年には生後6か月以上の小児にも使用可能となり、使用患者の年齢層が拡大した。多くのAD患者が薬剤の恩恵を受ける一方で、重篤な副作用は少ないものの、結膜炎などの眼表面障害の発症がよく知られており、眼科との連携が不可欠である。

本講演では、デュピルマブ等の新規薬剤選択肢によるAD治療の現状を概説するとともに、当院における皮膚科・眼科連携の実例を共有しながら、眼表面障害マネジメントの実践的なアプローチについて考察したい。

演題2 「デュピルマブ投与時の結膜炎発症メカニズムとその管理、 眼科・皮膚科の連携の取り組み」

庄司 純 先生 日本大学医学部視覚科学系
眼科学分野 臨床教授



<ご略歴>

1985年 日本大学医学部卒業
1989年 日本大学医学部大学院外科系眼科学卒業
1990年 銚子市立総合病院眼科医長
2002年 日本大学医学部兼任講師
2004年 庄司眼科医院院長
2007年 日本大学医学部視覚科学系眼科学分野臨床教授

デュピルマブ関連結膜炎(dupilumab-associated ocular surface disease: DAOSD)は、デュピルマブ抗体療法中のアトピー性皮膚炎患者にみられる眼表面疾患である。主に結膜炎を発症するが、眼瞼炎、輪部炎、角膜炎、ドライアイなど多彩な眼表面炎症を呈する。

DAOSDの病態に関してはまだまだ不明な点が多く、ドライアイ説、デモデックス説、Th17/Th22説などがある。DAOSDの診断は、眼痒痒感、充血などの自覚症状、強い結膜充血などの他覚所見、および眼脂の塗抹標本検査などにより総合的に診断する。疾患重症度は、軽症例がほとんどであるが、一部の症例では重症化して眼科介入が必要になる症例がみられる。眼科・皮膚科連携により眼表面疾患をコントロールし、安全にデュピルマブ抗体療法を行うことが重要である。

今回のセミナーでは、眼科介入時の診断と治療に触れながら眼科・皮膚科連携のポイントについて解説する。

Q&A ディスカッション <眼科・皮膚科の連携について>

sanofi | REGENERON

共催：サノフィ株式会社